「ルワンダの悲劇から学んだ教育の大切さ」

～教育を支えるWFPの学校給食～

NPO法人「ルワンダの教育を考える会」副理事長
カベンガ・マリールイーズ

2004年2月21日（土）
JICA横浜国際センター

日本のWFPの活動が世界でどれくらい人々の助けとなっているかルワンダについてお話しすることでお分かりになっていていただけると思います。
位置： 赤道の少し南
面積： 四国の1.5倍
平均気温：1年を通して平均最高２５℃、最低8℃。凌ぎやすい気候。
内戦時下、逃げる途中で薪にするため多くの木を切ったので今は禿山もできましたが、もともと緑豊かな国です。
母国語：ルワンダ語、教育は小中高フランス語で、中2になると第2外国語で英語を勉強します。その他に隣国のスワヒリ語なども話せます。
通貨： ルワンダ・フラン。為替レートは1円が2.5フラン～４フラン。

私がなぜ教育に集中したのか。自分の国が内戦になったとき、そして内戦時下で一番頼りにしたのが教育だったからです。
では、ルワンダの内戦はどのようなものだったのでしょうか。よく報道されているのは民族紛争ですが、少し違います。
ルワンダは王国でした。人々は王家とそれに属する人々のグループで牛を飼うことがメインの仕事です。次に農民。その他の人は森の恵みを利用したり、陶芸に適した粘土が豊富でそれで水かめや日常食器などを作り物々交換をして暮らしていました。

それから他の多くのアフリカ諸国のように、ルワンダも植民地となりました。
最初はドイツに支配されましたが、ドイツはルワンダのありのままを受け入れました。
ドイツ降伏後、ベルギーの植民地になり、ルワンダはすっかり変わりました。ベルギーは、それまでのルワンダの一切を否定し、言葉もフランス語に変えました。だから今でもフランス語による教育がなされているのです。
次に、人々を3つのグループに分け、それぞれに身分証名書を発行しました。
ツチ族（10頭以上の牛を所有するエリート族）、フツ族（牛10頭以下所有）、ツワ族（牛をぜんぜん持っていない）です。内戦でこの身分証明書で所属する族でない者という理由で虐殺された人々がいます。また、ベルギーは学校も作りましたが、入学できる子はツチ族の子供のみでした。

1959年選挙があり、負けた王家の人々は隣国などに逃れ、ルワンダ最初に難民となりました。その後紆余曲折を経て共和国になったが、新大統領は1年も満たない内に失脚、その後虐殺の時に大統領グループがクーデターを起しルワンダは表面的には平和になりました。
皆さんには難民がどれくらい辛いことか想像できないと思います。
難民となる辛さは、自分の国を、命が危ないから出なければならない。どこへ行くのかわからない。隣の国も受け入れたくないのに、嫌われているのに、そこへ無理やりに入っていかなければならない。そこでも死ぬかも知れないけど、自国より大丈夫だろうという気持。どうしても帰国したいと願っても、ルワンダ政府は帰国を認めず、避難先にとどまりそこの住民となるよう勧める。

1990.10.　1日帰国を願った難民たちに武器を持たせてルワンダを攻め、戦争が始まった。
最初は平和解決のため、隣国のタンザニアで何度か平和解決交渉が行われ、後一歩で新政府ができるというところで、新しい大統領をはじめ、隣国のブルンジ大統領を含む11名が搭乗していた飛行機がミサイルで打ち落とされた。犯人はいまだに分らない。それは私が2ヶ月の日本研修を終えて帰国したばかりだった。 このミサイル爆撃は花火のようだったがこれは死しかない。私の子供はこのミサイルを経験し、それがトラウマとなって日本で最初に見た花火を怖がった。ルワンダでは花火ではない爆撃が続き、泣くことも叫ぶこともできないでいる子供たちがいる。次の朝、軍隊は大統領に反対派の人たちの家に押し入り殺して出て行く。その後を若者が略奪する。ラジオは大統領が殺されたので危険だから外へ出るなと警告した。そして内戦が始まり、朝起きると命はあったけど、夜はどうだか分らない。夜が一番怖い。そんな毎日であった。電気、電話、は止まり、幸いにも私の家は水は出たので、近所に人に水を分けた。ある日隣人が私のうちでシャワーを浴びている時に、その人の家が爆撃にあった。たまたま私の家にいたので命は助かった、このときから家の中は危ない。外であれば死んでも誰かが死んだことに気づいてくれる。そして逃げることを考えた。どこに？でも、命を救うためにともかく逃げなければならい。途中人が死んでも何もできず、まず自分が先であった。食べるものは何も無い。子供に何も食べさせてやれない母親として無力さが辛かった。途中で出会った青年からカビの生えたパンを、いつもは6フランで帰るパンを200フランで買い子供に食べさせた。飲み物は雨期で道の水溜まりの水をすくって飲ませた。途中でトラックに大勢の難民とともに乗せてもらい、運転手が行くところまで乗せて貰って、コンゴ国境にたどり着いた。そこは地面も見えないほど難民がいた。そこでどうして生き延びるか？生きるためにはどうしたらよいか？

皆さんに覚えて欲しい。　生きるには教育です。物は無くなります。でも、頭の中の教育だけは誰も取ることができない。私は日本で学んだ家庭科を思い出し、残った3000フランで賞味期限の無いドーナッツ

を作り売りました。日本のホームステイ先に無事を知らせるため「生きています」と平仮名でFaxを送りました。たまたま私の後ろにいたＡＭＤＡの日本医師が私のFaxを見て、私に通訳を依頼し300ドルの給料をもらいながら5ヶ月難民キャンプで働きました。これこそ教育のおかげです。この給料で私の家族、親戚など30人が1日１食は食べられます。ここでWFPに出会いました。　WFPと読めなくても、WFPのマークは分ります。難民たちはWFPトラックが来ると歓声を上げます。とうもろこしの粉と豆と油をもらって家族で食事ができます。小麦粉の入っていた袋はバッグもになり、油缶は水汲みの道具にもなり、小麦粉の保管になります。皆さんの善意が難民キャンプでは、安心して食料が得られることになるのです。できることなら、皆さんをキャンプに連れてきたい。食料は配られているところを見れば、皆さんのしていることがどんなに難民が待ち焦がれていることが分るでしょう。WFPのトラックに行列しても。自分のところまで回ってこないこともあるけれど、でもトラックが来ることだけで子供たちの笑顔を見ればみればワクワクするでしょう。私が難民キャンプで感じたことは、子供たちに食べさせてやれない母親の辛さ。戦争を起こす人は何を考えているのだろう。今日生き延びられるか、明日死ぬか分らない。ルワンダでは３ヶ月に一度豆の収穫がある。そんなことを考えると、私はルワンダの戦争は無知から起きたことだと思う。教育があれば何とかなったのではないかと思う。

私にできることとして、今小さな学校を作っています。できるなら高校、大学と広げていきたい。最初のころは、子供たちに何も夢が無かった。最初は１６人、１ヶ月後には６０人の子供が学校に来るようになった。　２ヵ月後、大きくなったら何になりたいかという同じ質問をしたら、子供たちはいろいろ夢を話すようになった。これは本当に教育のなせる業だ。日本では子供たちに５年日記、１０年日記が与えられる。５年間安心して日記が付けられる。また３０年ローンがある。こんなことができる国がどこにあるだろう。安心して生き延びられる国は日本のほかに知らない。８億人の人が夜食事ができない、５秒に１人の子供が飢餓で死ぬ。日本では５年日記が付けられる。３０年ローンが組まれる、私は羨ましくてならない。私は、この生活を世界の多くの子供たちにもわたるよう祈っている。
私は日本の教育に惚れている。私の子供に６歳になったら入学案内が届いてびっくりした。ルワンダでは学校にお願いしても受け入れてもらえないことが往々にしてある。日本では入学前に健康診断があり、教科書が配られ、２週間したら給食が始まる。ルワンダでは一冊の教科書を名５，６人で回し読みをする。
人は持っているものしか与えられない。日本は平和を持っている。その平和を子供たちに分けて上げて欲しい。わける方法は、募金だけではない。毎日の生活の中でできる子たちがある。　笑顔があれば、募金箱を無視することもできない。まず、笑顔から始めよう。その笑顔が世界の子供たちに届くと信じている。

一番熱心に教育について語り合った私の兄は内戦中殺された。兄の娘に、お父さんを殺した人たちを許すように言った。姪はそんなにお父さんを憎んでいたのかと私を咎めた。私たち兄妹はこの子に教育

だけ受けさせようと決めた。大学に行くようになった姪は「自分が辛い思いをしているのを、他の子供と思ったら、永遠にルワンダは平和にならない。自分が平和を作らなければ」と電話先で言った。姪が教育を受けていなかったら、父を殺した人を憎んだまま母親になり、子供に復習を願ったかもしれない。私が戦争で受けた辛さを教育に切り替えていきたい。
現在私学校には２８４人の生徒がいて教室は６室。幼稚園３クラス、小学校１年から３年を増やしていきたい。
日本の平和を失わないように。中東を御覧なさい。文句が言えるのも平和だから。一度失えば戻ってきませんよ。
学校の様子を写真で紹介。質疑応答。
終了

無断転載などを一切禁止します　　WFP応援団